

あまのいわや

ふしみみさを 文

ポール・コックス 絵

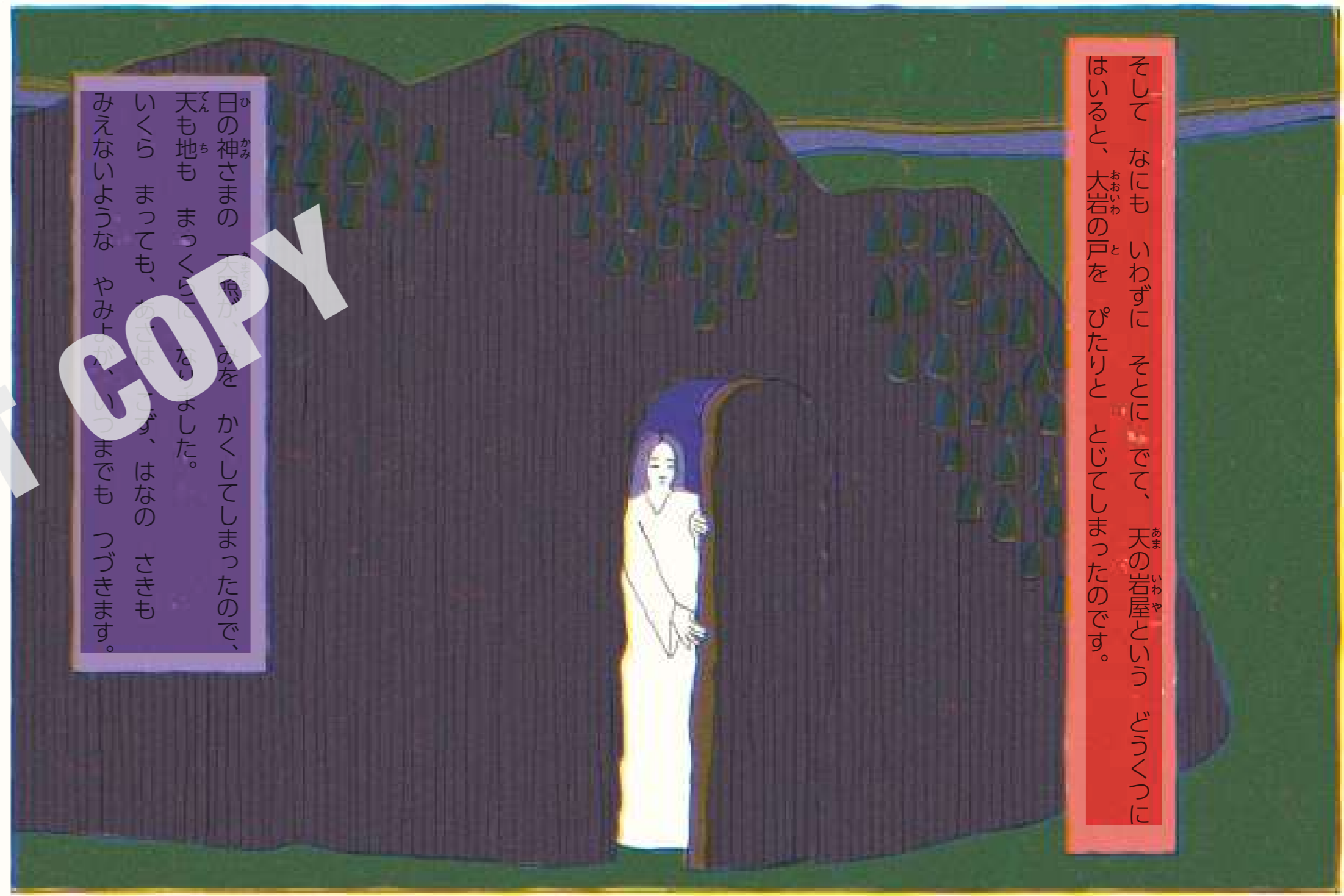
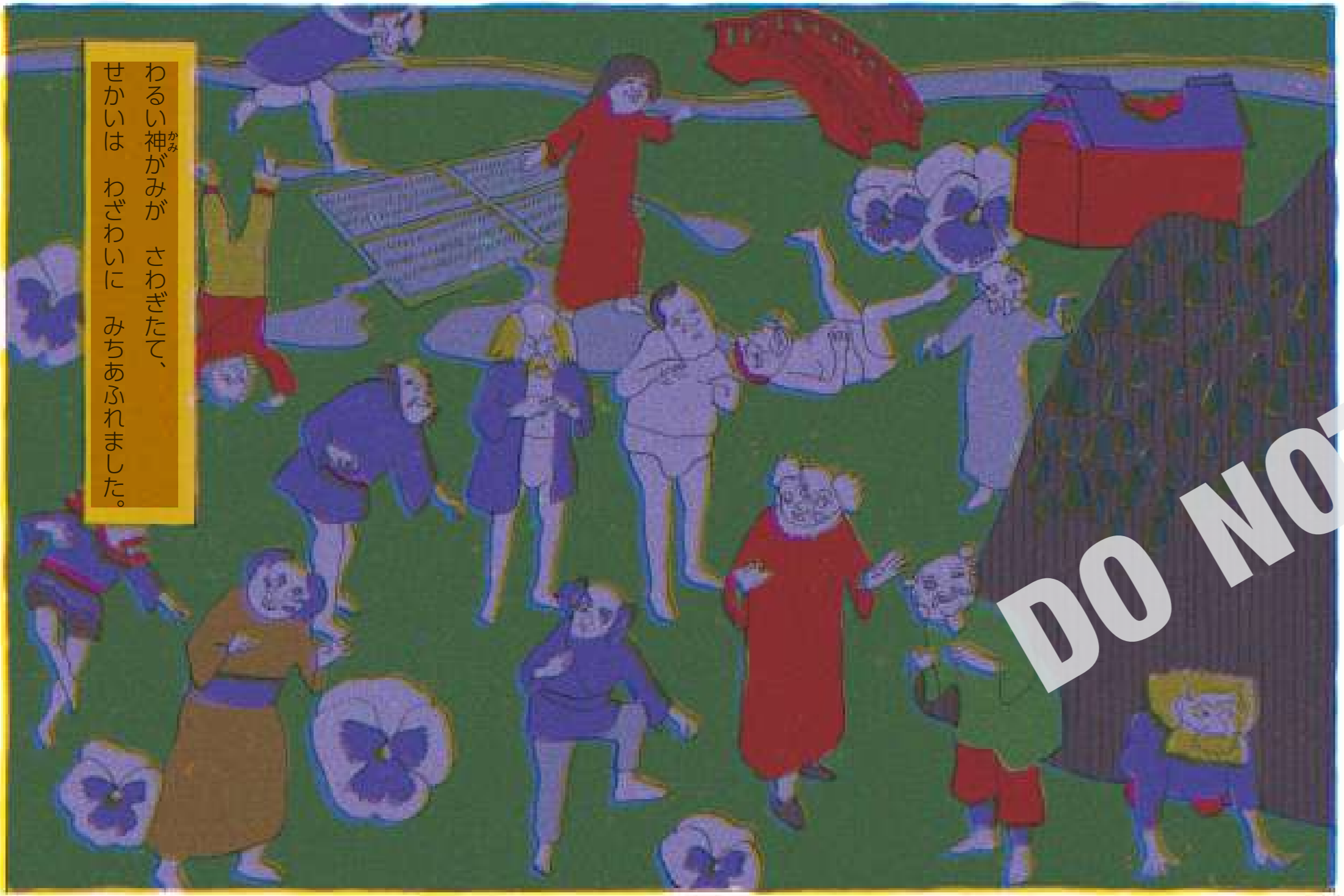
岩崎書店



そして なにも いわずに そとに でて、 天の岩屋とらう びりへんに
はいると、 大岩の戸を ぴたりと とじてしまったのです。

日の神さまの 天鳥羽を かくしてしまったので、
天も地も まっくらになりました。
いくら まっても、 はなの さきも
みえないような やみやが、 つづきまでも つづきます。

わるい神がみが さわぎたて、
せかいには わざわいに みちあふれました。



いったい どうしたら いいのでしょう。
高天の原の 神がみは あつまって、
ながいこと そうだんしました。



そして ついに、ちえの神、思金が
すくと たちあがりました。

「よし、いよいよ。
まず くらやみでも ときを つげる、
ながなきの ニワトリを 百羽、つれてきてくれ。
それから かじやの神は ほこを、かがみの神は かがみを、
たまつくりの神は ながい たまかざりを つくるのだ」





天宇受売あまのうすめが おどりながら こたえました。
 「あなたさまより とつとつと神かみが いらしたのです。
 それが うれしくて、みんな わらっているのよ。」

すかさず べつかみの神かみが、天照あまてらすの まえに かがみを さしだしました。
 かがみに うつつた こつこつしい かおを みて、
 天照あまてらすは おもわず みを のりだしました。



神かみがみの にぎやかな わらいごえは、天照あまてらすの 耳みみにも とどきました。
 天照あまてらすは くびを かしげ、大岩おおいわの戸とを わずかに おしあけました。

「ほしい なにげいどしほうっ わたくしが けいけい けいけい」
 天も地くちも やみになり、こまっているはずなのに「」